

# 青谷人骨ほぼ渡来系

## 埋文センター「交易拠点裏付け」

40個体調査  
鳥取で報告会

1/18山沖  
国史跡・青谷上寺地遺跡（鳥取市青谷町青谷）で出土した弥生時代後期（2世紀ごろ）の人骨のほとんどが、朝鮮半島や中国大陸からの渡来系とみられることが、鳥取県埋蔵文化財センターなどのDNA分析で分

かった。人骨間に母系の血縁関係がみられず、同センターの浜田竜彦係長は「青谷が国内外の多様な人々が集まる交易拠点であったことを裏付ける重要な発見」と評価している。

同遺跡は低湿地で腐敗しにくい環境のため、弥生人の脳や人骨のほか、土器や鉄器をはじめ多彩な遺物が出土し、朝鮮半島などとも交流があったとされる。DNA分析は、同センターと国立科学博物館（東京都台東区）、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）が今春から実施。同遺跡から出土した約100個体の人骨のうち約40個体の内耳骨などを調査している。

17日に鳥取市内であった中間成果報告会で、国立科学博物館の篠田謙一副館長が調査内容を報告。母方からのみ受け継がれるミトコンドリアDNAを分析した結果、日本列島特有の縄文系が1個体のみで、他は全て渡来系の特徴が見られたとし、「縄文系集団が一定数存在すると思っていたが、そうではなかった」と驚いた。弥生時代は渡来系と在来の縄文系との混血が進んだ時期とされるが、混血の特徴はみられなかった。

同遺跡の人骨は殺傷痕が多く残るが、背景は明らかになっておらず、中国の史書に記述がある同時期の「倭国大乱」との関連が注目されている。県埋蔵文化財センターの浜田係長は「結びつけていいかは考えるところだが、分析が進めば新しい仮説が立てられるかもしれない」とした。今後は父系を含めて分析できる核DNAを調べ、2019年3月2日に鳥取市内で最終報告を行う。



青谷上寺地遺跡から出土した人骨のDNA解析について報告する篠田謙一副館長—鳥取市青谷町青谷、市青谷町総合支所

出土人骨

何が見えるのか  
ゲスト

篠田 謙  
濱田 竜彦